

論文審査の要旨
Summary of Dissertation Review

博士の専攻分野の名称 Degree	博 士 (学 術)	氏名 Author	王 貞 貞
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 Title of Dissertation	現代日本語の「受身・可能・自発・尊敬」表現におけるジャンル間の使用状況の相違に関する研究 —助動詞「(ラ)レル」を軸に—		
論文審査担当者 Dissertation Committee Member	主 査 Committee Chair 広島大学大学院国際協力研究科 教授 佐藤 暢治 印 Seal 審査委員 Committee 広島大学大学院国際協力研究科 教授 堀田 泰司 審査委員 Committee 広島大学大学院国際協力研究科 准教授 深見 兼孝 審査委員 Committee 広島大学大学院文学研究科 教授 高永 茂 審査委員 Committee 関西学院大学大学院 言語コミュニケーション文化研究科 教授 于 康		
〔論文審査の要旨〕 Summary of Dissertation Review	<p>中国語を母語とする日本語学習者の勉強している内容が日本語母語話者の実際の使用実態とかけ離れているという指摘がしばしばなされる。本論文はそうした問題意識から、現代日本語において受身・可能・自発・尊敬という4つの用法を持つ助動詞「れる・られる」(以下「(ラ)レル」と略す)に焦点あて、「(ラ)レル」の全体的な使用実態に関連する諸形式をも含め解明することを目的としたものである。その目的を達成するため、本論文では現代日本語の文字言語と音声言語から「新聞記事」「文学(地の文)」「ブログ」「テレビニュース」「テレビドラマ」「トーク番組」という六つのジャンルを選び、受身・可能・自発・尊敬用法の各表現形式の用例を抽出し、データの統計と分析を行っている。</p> <p>本論文は7章からなる。第1章は序論であり、本研究の研究背景と研究目的、研究方法と研究資料、および論文の構成を述べる。第2章は、「(ラ)レル」の先行研究を検討する。特に分類上の難点となっている受身と可能、および可能と自発の重なりあう点について検討し、本論文が用いる分類基準を明示する。第3章から第6章では、六つのジャンルから抽出した資料をもとに、受身・可能・自発・尊敬の順に「(ラ)レル」形式を中心に諸形式間の比較対照を行う。第7章は結論であり、本論文を通じて明らかになった次を述べる。1) 受身・可能・自発・尊敬4つの用法を問わず、六つのジャンルには相違点よりも、類似点の方が多い。このとき類似点は個々の用法自体の特徴を示し、相違点はジャンルの性格によるところが大きい。2) 「(ラ)レル」4つの用法の使用率はジャンルを問わず似たような傾向を示し、大差はない。受身はいずれのジャンルにおいても主流をなし、可能は受身に次ぐ高い使用率を示すが、受身との間にきわめて大きな差が認められる。尊敬と自発は、ジャンル間において順番が前後することがあっても使用率からすれば、全体的に尊敬の方がやや多い。3) 可能・自発・敬語表現のほかの形式を加えてみると、どのジャンルにおいても用法間の割合に大きな変化が起こる。自発に目立った違いはないが、可能と敬語は著しく増えている。同じような意味を持つ他の形式の存在が、可能と尊敬の「(ラ)レル」の使用の少なさにつながり、さらに「(ラ)レル」における用法間の偏りという結果をもたらす。また、この第7章では、研究結果を踏まえ、日本語教育への橋渡しとして母語話者もほとんど使わない自動詞受身に時間を</p>		

とって学習する必要性への疑問、さらには今後の課題として通時的研究の必要性等を述べる。

本論文は、現代日本語の助動詞「(ラ)レル」が現在抱える問題点の重要性を理解したうえで、関連する先行研究を消化し、言語学研究に不可欠な精密な分析方法を用い結論を導き出していることが高く評価され、その研究内容は博士の学位取得水準を凌駕しているものと判断した。なお、本論文の主要な内容は学術論文3編（査読付きで単著）として公表済みである。

以上、審査の結果、審査員全員で、学位請求論文として独創性と確実性を兼ね備えており、博士（学術）の学位を授与されるに値する内容の論文として合格と判定した。